

創立 40 周年記念誌～伝統の継承と創造

技と人をつないで

庭

未来へ



一般社団法人日本造園組合連合会

創立 40 周年にあたり

大自然をつつむ地球は正確にその公転の歩を進め、一般社団法人として新たな第一歩を踏み出した日本造園組合連合会は、ここに創立40周年を迎えることになりました。

昭和48年11月、「仲間同志の思いやりと友愛の精神」を基本理念に発足して以来、着実な歩みを続けることができましたのも献身的に支えていただいた歴代役員、組合員の皆様、並びに関係官公庁、団体のご支援とご協力の賜物であり、心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

築きあげてきたこの40年間は、まさに激動の時代でありましたが、終始一貫して技能士はもとより造園業界の評価向上と造園技法の継承と開拓、これを支える人材の育成に取り組み、さらには技術と経営に優れた提案型企業を目指す活動、幅広いメディアへの広報など、より多くの方々に造園という文化に触れ、その素晴らしさを理解していただく活動を展開してまいりましたが、今後も造園が本来持っている芸術性を発揮し、技術と経験、知

恵を生かした緑豊かな安全・安心で活力ある地域づくりの推進や、時代を先取りし人と自然が共生する持続可能な社会の形成への貢献など、業界として次世代に継承する使命を果たすことによって、輝かしい未来が拓けるものと確信いたしております。

このため、花博や都市緑化フェアでの出展庭園や技能五輪国際・全国大会課題の変遷、造園技能競技大会や技を生かす庭づくり塾など、これまでの出展やイベントに関係した庭園作品の写真・図面を中心に、現代の庭づくりへの提言やこれからの仕事に生かす手がかりとなるよう構成のうえ、この記念誌を刊行いたしました。さらなる業界の進展に向けてその貴重な技術資料となることを願っております。

限らない造園業界の振興のため、優れた人材、自信と誇りに満ちた業界を目標に取り組む所存でありますので、関係皆様の一層のご指導、ご後援をお願いし、ご挨拶いたします。

白井 昇

(一般社団法人日本造園組合連合会 理事長)

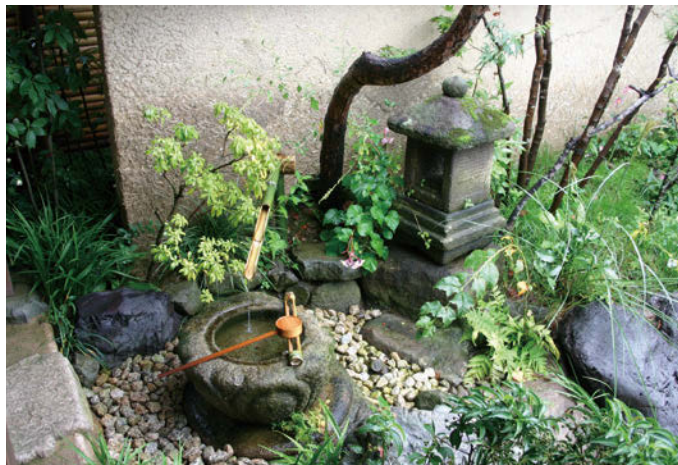
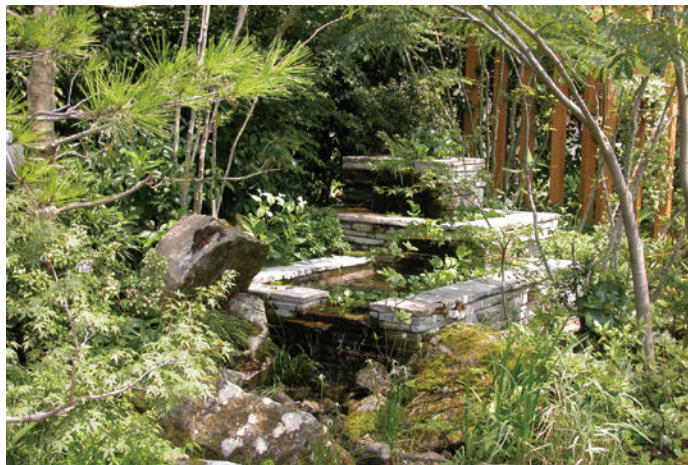
目次

理事長あいさつ	01
グラビア	03
寄稿	11
全国造園技能競技大会	18
しずおか国際園芸博覧会	32
技能五輪全国大会	40
技能五輪国際大会	48
全国都市緑化フェア	52
技を生かす庭づくり塾	60
造園実習指導力向上研修会	62
震災復興に役立つ 「人力による運搬組み立て工法研修会」	64
女性技能者育成に向けた 技能向上研修会、庭づくり実演	65
東日本大震災復興支援活動	66
リ・ガーデン、庭園アドバイザー	70
ものづくり立国～次世代フェスタ・大航海フェア	72
庭の日制定	73
ジャパン庭園マイスターズ、庭丸	75
刊行物	76
造園技能検定	80
登録造園基幹技能者	83
ガーデニングショー	85
造園感謝祭、青年部、造園シンポジウム	89
年表	91
あとがき	96

グラビア ～写真で見る歩み～



技を生かす庭づくり塾（福島会場）『四季を彩る庭』



しずおか国際園芸博覧会
パシフィックフローラ 2004

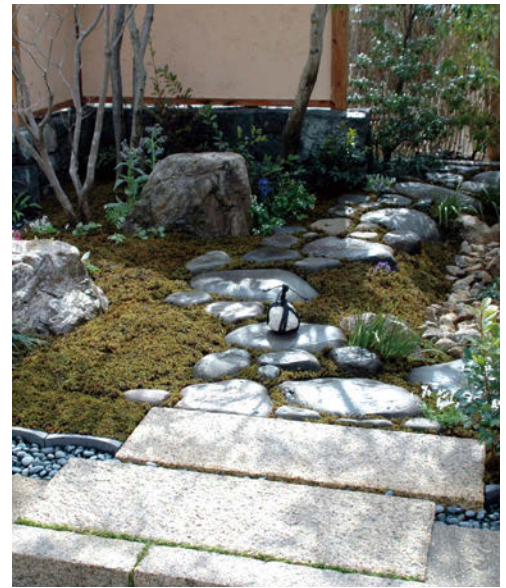


全国造園技能競技大会





全国都市緑化フェア





『みんなが集うやすらぎの庭』作成・贈呈／仙台市若林区東通仮設住宅

震災復興支援活動



『技を活かした花壇』



瓦礫処理活動



瓦礫処理活動

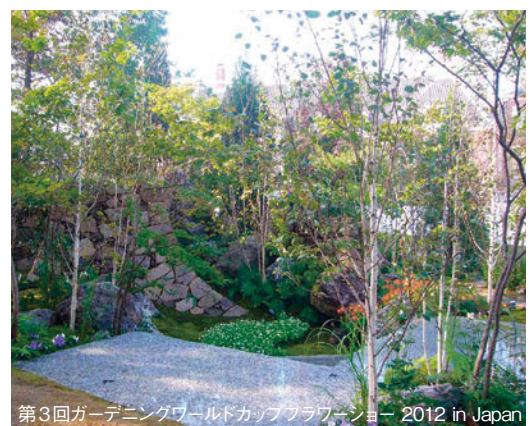
技能五輪全国大会



技能五輪国際大会



ガーデニングショー



【寄稿】

創立 40 年に寄せて

一般社団法人日本造園組合連合会創立 40 年記念誌の発行にあたり、
各界を代表する 18 人の方々に寄稿をお願いしました。

寄稿いただきました方々に、改めてお礼を申し上げるとともに、
皆様の言葉を大切に、今後の活動に繋げていくよう務めて参ります。
ありがとうございます。

*五十音順にて掲載

尼崎 博正（京都造形芸術大学）

創造する伝統…

いつの時代にも創造的であったものだけが伝統となり、伝統は新たな創造性を刺激し続けてきた。

これは造園・ランドスケープデザインの世界も例外ではない。夢窓国師しかり、小堀遠州しかり、小川治兵衛しかり、伊サムノグチしかり。

しかし、他の領域と決定的に異なるのは、自然への深い洞察に根差していることにあると思う。この根源にあるものを忘れては、自己満足的なデザイン、あるいはテーマパーク的な空間造形に落ち入ってしまいかねない。心したいものである。

『作庭記』を引き合いにこすまでもなく、日本庭園は「人と自然の共同作品」であり、紛れも無く日本のランドスケープの原点といえる。

伝統的日本庭園から学ぶことは数限りないが、ここでは二つの点に注目してみよう。

一つは、茶の湯の理想の環境とされる「市中の山居」。都市化が進む中で、中世の人々が都市と自然、自然と人との関係を憂慮した末に導き出した空間概念である。

喧騒な街の中の小さな空間に樹木を植え、そこで茶の湯を楽しみながら自然について深く思索する場としたという。

大切なのは、都市環境への問題意識と具体的な解決策の提示ということだけにとどまらない。彼らはそこで、「非日常の美意識」という新たに創出した美的概念に基づいて、「茶の湯」文化を育んだからである。

この事実は、現代の私たちに重要な命題を突き

つけている。庭園であれ、公園であれ、私的・公的を問わず、そこでどのような文化が育まれていくのか。後世の評価は、この一点にかかっているように感じる。

一方、空間の美には別の大きな要因がかかわっている。技術と技能である。名園が時代を超えて感動をもたらししてくれる所以でもある。

技術は不特定多数へ伝えることが可能だが、技術に美意識が付与された「技能」は、そうはいかない。いわゆる「口伝」の世界なのだから。

「生きものと語り合う技術」を基本としながらも、さらに感動的な空間を創出していくためには、手触りの感覚を大切にしつつ、口伝による美意識の継承が不可欠だろう。

大塚 守康（株式会社ヘッズ 会長）

心の豊かさを求めて

40年前というと、日本中を沸かせた大阪万博の直後であり、ニュータウン建設が盛んに始まった頃かと思います。会員の皆様はそれらの事業で大いに力を蓄えられて、日本造園組合連合のスタートとなったのではないかと推測いたします。

ところで、造園の仕事は土や水、樹木や石といった自然の素材を使って、自然が成す以上の美しい造景をつくり上げることに、他の技術では成しえない最大の特徴があります。それによって、単なる経済性を超えた心の豊かさを人々や生物にまで与えることができます。まさに、生きるもの全てを対象とした生命文化の創造といえます。

ここで少し気になることがあります。造園がつくり

上げる理想郷にはなぜか囲いがあり、その中だけで成立していることです。この囲いを限りなく大きくし、街や地域全体を理想郷にできないでしょうか。それには、自分だけの世界を造り上げるのと違って、多くの関係者、すなわち社会とのコラボレーションが必要になります。これからの造園が更なる発展を重ねるためには、この社会性の強化が是非とも必要になります。

東北の大災害から2年が過ぎた今、現地では土木を主体とした復興事業が進められています。これらは堅固な安全性のもとに経済基盤を再構築しようとする事業です。しかし、それだけでは豊かな生活は戻ってきません。土木で造り上げられた基盤の上に造園の仕事が仕上げをしてこそ、生きた街や村が再生されるのです。

造園の仕事でもう一つ特徴的なことは、速成は禁物ということではないでしょうか。本来は自然が悠久の時間を掛けて成しえるものですから、我々もじっくり腰をすえて機が熟すのを待ち、対象を充分見つめて理解し、それから仕事に取り掛かる、東北での我々の活躍における支援はこのようにして始まるのではないのでしょうか。

賀来 宏和（株式会社グリーンダイナミクス）

植物についての造園技能の研究開発

さまざまな機会に皆さんと仕事をさせていただくようになりはや20有余年が過ぎようとしている。この間、絶頂期にあった時代は大きく変化を遂げ、経済の沈滞や国際化の進展、そして、本格的な高齢社会の到来など、社会の様相は一変している。

われわれの身の回りの造園事情も大きく変わり、花や緑への関心はガーデニングブームを生み、環境への嗜好から伝統的な庭園手法では必ずしも消費者の需要にこたえられない時代を迎えている。

もちろんこうした新しい動向に舵を切り、草花などのあしらいやエクステリアの創り方などに技術力を高めることも一つの選択ではあろう。

しかしながら、狭小化が進む都市の宅地や開

発地にいたずらに雑木と称される樹種や郷土種と称して造園的な管理特性が不明な野生種を短絡的に持ち込むことに疑問を感じるのは私だけであろうか。

日本の庭園技術は長い伝統の中で、この国の庭づくりにもふさわしい樹種を選んできた。それは適切な匠の技を駆使することによって日本の気候特性はもとより、日本人の価値観や美意識、そして生活様式に見合う姿かたちを演出できる植物であった。

一方、植物資源に恵まれたこの国では多くの野生種が、庭園樹や緑化樹としての可能性を秘めながら未利用な状況にあるといわれる。

今後は、伝統的な造園技法にみられる樹種の選択とそれを礎とした造園技能は現代都市にお

いてもきわめて合理的に活用できる知恵であることを一層広く社会にアピールするとともに、時代の要求に対応して、新しい空間様式にもふさわしい植物についての造園技能の研究開発が必要ではなかろうか。まさに「伝統」の継承と「伝統」の創造の一つの解であらうと思う。

小沼 康子（有限会社エルムランドスケープデザイン）

子供たちの未来へ

庭には二様の主役がいます。一つは「庭を楽しむ人」。もう一つは「庭をつくる人」。

創立以来、造園連では、時代の先を読み、造園業界をリードしてきたことは言うまでもなく、さらに、伝統的な技の継承と共に優れた技術技能者、「庭をつくる人」を数多く育ててきました。

もう一方の主役「庭を楽しむ人」というと、現在は、どこにいるのか、姿が見えにくくなっています。40年前、人々はもともと庭に親しんでいたと記憶しています。

振り返ると、造園連創立期は、高度成長期に向かい、これからは造園の時代だ、緑だ、公園だ、庭だと、上昇する社会潮流に乗って新しい造園

空間が創出され、未来はバラ色、夢と希望にあふれていました。やがてオイルショック、バブル崩壊と価値観の変換を迫られ、物から心の時代と言われるようになって久しい現在、人々は癒しや安らぎを求め、自然と共生する日本庭園は変わらずの人気です。しかし、厳しい時代を過ごす間に、生活の原点「庭」への関心は、どこかに置き忘れてきたかのようです。

もっとも庭に親しんで、楽しんでほしいのは、子育て世代。それは、今日の社会を支え牽引する世代。まさに、造園連発足の頃生まれた子供達。現在40歳前後の彼らの生活に関する価値観は、多様化しているとはいえ、「健康』『生きがい』『家族の絆』に重きを置き、「快適な住環境」や「豊かな自然に囲まれた生活」を求めています。このことから

身近な自然である「庭」への関心がないのではなく、時代の荒波の中で、「楽しみ方」を忘れていているのでしょう。忘れかけた記憶、庭で過ごした楽しい思い出を次代の子供達に伝えてほしいと思います。

これからの40年はどんな波がやってくるのでしょうか。どんな波が来るにせよ、生活の原点「庭」は、「健康』『生きがい』『家族の絆』を育む場であることは変わりません。日本の豊かな自然と共生する生活文化のもと、細やかな感性と伝統的な美意識に支えられた庭の魅力を伝えることは、明るく豊かな未来につながっています。

造園連には、未来に向けて「庭を楽しむ人」を育てること、そして「庭」を介して子供を育てる「庭育」に力を注がれることを期待しています。

近藤 三雄（東京農業大学造園科学科教授 都市緑化技術研究室）

首都高速大橋ジャンクションは何故、回遊式日本庭園風情にこだわったか

筆者が心血を注いで協力した首都高速大橋ジャンクションの屋上は、内外に類例のない高さ7～35m、幅16～24m、縦断勾配6%のコロッセオ風の外観を有した立体構造のループ状を成し、面積約7,000㎡で都市公園法に基づく立体都市公園である。

そこを何故、極力「回遊式日本庭園」風情のデザインにすることになったのかである。全て「造園の魅力を広げたい」という一念からである。

この事業は国内外から注目される一大プロジェクトであり、かつてなかった壮大な土木構造物の屋上空間である。したがって出来上がった緑化空間は世間の注視の的となり、良くも悪くもさまざまな

評価が出ることが予測される。そのための作品づくりにあたってはメッセージ性の高い思い切った斬新な発想とデザインが求められる。したがって単なる都市公園の様相ではなく、空間全体を「回遊式日本庭園」を現代風にアレンジし、庭園内の各所の情景と植物の美しさや香り、さらには高所からの眺望を楽しめ、日本の伝統文化を体感できる和風モダンな空間として整備した。これらのコンセプトを集約し、空間の名称を「目黒天空庭園」とした。

和風モダンな回遊式庭園として日本的風情を演出するために、国内の要所要所にマツ等の見栄え良い庭木仕立て物をそれぞれの樹種の樹形美を生かせるように配した。

さらには日本庭園の構成要素として欠かせない五山の築山や灯ろうを配し、位置的にも景観的に

も中核をなす箇所には東屋と、その周辺部を坪庭風にするなど、極力、和風モダンな雰囲気醸造するような仕上げとした。さらにこの点を強調するため園内の要所要所に信楽焼の陶製品（舗装材、見切材、大型コンテナ）を多用した。その色彩も信楽焼を特徴付ける生色（群青色）の風合いとした。

大土木構造物の屋上をさまざまな制約がある中、より魅力的な造園空間とするために目一杯頑張ったつもりである。いずれにしても良い品と技術を使い、良い空間づくりを一人一人の造園家が心血を注いで行うことが造園の魅力を広げるための何よりの方策となる。

進士 五十八（東京農業大学名誉教授）

玉川の帰真園

2013年4月14日東京都世田谷区立の二子玉川公園で、その中核施設「帰真園」(きしんえん)が開園した。

園名は、真に帰る。自然に帰れ! 英語では、リターン・トゥ・ネイチャー。いろんな解釈が可能だが、単的にはホンモノを目指す日本にしたいということだ。

現代という時代は上は総理大臣からお店の売子にいたるまで、自分では責任がとれないサラリーマン社会だ。選挙民を気にし、上司の指示に従う。だから自分の責任において、隅々まで目配りし絶対の自負をもって仕事をするというひとは少ない。

八条宮智仁、智恵親子による桂離宮のような完成度は望むべくもない。こんな時代、奇しくも拙著

『日本の庭園—造景の技とところ』(中公新書2005年)贈呈が縁で、世田谷区内に将来全国に知られる名園を作りたいので指導的助言をと、当時の熊本区長に頼まれた。担当の春日部長も昔から都市美委員会や風景条例での仲。何んとかホンモノの日本庭園を完成したいと腐心してきた。熊本区長自身も各地の現代作品を見て歩かれ意見を求める。そこで私、日本庭園は作庭家に権限と責任を与えて命懸けで造園してもらうのが一番。ただ税金によるので一流を選ぶ手続が肝要と提案。日本造園学会賞受賞者はじめ実績のある作庭家のプロポーザル、庁内課長10名の投票で決定することにした。

こうして作庭家高崎康隆氏、役所設計業務に戸田芳樹風景計画のコンビで造園事業がすす

む。氏らの造園コンセプトは世田谷のシンボル清流多摩川、その源流から河口までの縮景、それに富士への眺望、武蔵野とハケの湧水。ところが問題は議会の意見、ゼイタクとか。そこで私、ユニバーサルデザイン、万人のための日本庭園、また区がすすめてきた日本語教育特区のための日本文化の体験場、旧清水邸書院を大手ゼネコンの社会貢献として寄付で文化財復原、もちろん国分寺崖線と多摩川の自然環境共生の三大特色をアピールして理解を得た。その趣旨を園内各部の名称に付け帰真園の統一を図った。いやがられても私は徹底して監修、責任を果たした。後は多くの市民に愛され時を重ねて名園に育つのが夢である。

鈴木 誠（東京農業大学教授・東京農業大学国際日本庭園研究センター代表）

世界遺産としての「日本の造園 (Japanese Gardening)」

日本の造園技術を守り育てて40年。40年といえば、昨年2012年はユネスコにおける「世界遺産条約」採択40周年記念の年でした。

さて、みなさんは同じユネスコの「無形文化遺産」(Intangible Cultural Heritage)をご存知ですか。10年前の2003年に採択された「無形文化遺産保護条約」は世界遺産同様、人類が共有すべき無形文化遺産を保護する目的をもちます。

その無形文化遺産に、「和紙 日本の手すき和紙技術」が今年登録提案されました。2013年度中審議、2014年登録が目標ですが、同様に「和食」の登録手続きも進められており、こちらは2013年度内に結果が出る予定です。

20年ほど前の1994年、『欧米人の日本庭園観』(東京農業大学)を研究成果としてまとめた際、日本庭園の歴史的な世界への広がりと共に、「欧米人には日本庭園の理解は無理、という時代が長く続いてきた」ことを指摘しました。

さらにその後、10年ほど前から本格的調査を始めて2006年、『海外の日本庭園調査報告書』(日本造園学会)を刊行しましたが、400以上の公開日本庭園が世界に存在する事実がわかってきました。また、これまでに300以上の欧文による日本庭園関係図書が世界中で出版されている事実も把握できました。

1992年、日本では日本庭園に関する学術団体「日本庭園学会」が創設され、既に20年を数えます。1993年に発足した英国日本庭園協会(The

Japanese Garden Society)も20年の歴史を刻み、現在では会員数800名を数えるに至っています。これに加えて2010年、北米日本庭園協会(North American Japanese Garden Association)が強力な組織として発足し、北米の250にのぼる公開日本庭園のネットワーク化のみならず、北米での日本庭園(文化)の普及啓発をめざしています。2012年10月の最初の総会には150名が参集して、「日本庭園」をテーマに3日間様々な議論が展開されました。日本からも日本庭園学会会員7名が参加し、同協会との連携協定を調印しています。

そこで、次の10年以内に実現する夢として、今、「日本庭園 日本の伝統的造園技術」がユネスコの無形文化遺産に登録されることを願っています。

造園連50周年への行動目標としても、ぜひ、皆さんと共にこの夢を共有したいと思います。

高崎 康隆（高崎設計室有限会社代表取締役・石組師）

日本庭園の魅力を広げる

現在、二子玉川にて作庭中の世田谷区立日本庭園では、関東地方で産出する庭石を使用した。根府川石は私の最も好む景石で、カドがあり、石肌・色・形状の多様さは尽きることなく、各石の個性を前にしていかに据えるか、いかに組むか、楽しくてしょうがない。筑波石には洪くて独特の存在感があり、丸い石もカドのある石もあって、これも好きな景石だ。みかほ石の使用は今回が初めてであったが、7トンクラスの割石によっての瀧組は豪快な水景を実現した。緊張感のある石材で、今後も機会があれば是非使いたい。榛名石は丸味を帯びたものが多く、時間とともに黒味を帯びるが山から出したばかりの肌は白みが強く、存在感では他の3

石材に及ばない。というのが今回使用してみたの4種類の石についての感想である。

このプロジェクトは、自治体で作る大規模で本格的な日本庭園として貴重である。また、景石の多量さも特筆される。関心のある人は多く、造園学会関東支部をはじめ施工現場見学会が幾度もあり、これまでに100人ほどの見学者の案内を務め、いろいろなご指導や感想を頂いた。その中で意外と思われたのは、複数の女性から「榛名石って、かわいい」という声があったことだった。

造園連新聞「続・千樹萬幹」欄でも2度ほど書いたことだが、近年、庭石の需要は減少し続け、閉山が相次いでいる。庭園材料は、生産・採取／運搬／加工／施工というシステムが支えるものであり、そのうちのどれが欠けても入手できない。ま

た、それぞれに道具や機械が必要であり、それらについても製作・流通のシステムがある。庭園をつくる人ともは、プロジェクトがあって初めて活躍の場が生れる。日本庭園プロジェクトを生み出す工夫を考えたい。

日本の「かわいい文化」が注目され、きゃりーぱみゅぱみゅの歌は73カ国で配信されたそう。薄く、軽く、明るいSANAAの建築が数々の受賞で世界的に評価される。草間彌生のドットが圧倒的なパワーを持ち続ける。全国のゆるキャラが地方経済を活性化させる。「不易と流行」とは良く耳にするが、日本庭園の流行についての議論は圧倒的に少ないと感じている。

龍居 竹之介（日本庭園協会名誉会長・庭園研究所所長）

温故知新の本来

物事を伝えることは、何にしても実に難しい。

本だけ読んででもできることばかりではないし、さればとて実技だけの工夫でよいともいえない。

中国の『莊子』が説くには書物の知識を重んじる皇帝に車大工が実際の技を大切にといったとか。

冬の露地を彩る敷松葉のある本は千利休が露地の木を松一色とし、冬はその葉を一面に敷いたといえ（『茶湯諸道具初発覚書』）、他の本は古田織部が敷松葉の創始者だと主張する。

新茶を用いる口切の茶事は冬のほめて朝の寒気が強く、土は凍り霜柱が立ち見苦しいため、織部が松葉を敷いたのだ（『茶譜』）という。

ある地域で庭づくりを学べば、そこでの技は修

められるが、他の地域でもその技がそのまま通用するかどうかは分かりはしない。庭には地方色が強くあるためだ。

だからといって、一々それぞれの地域の技術を学び取ることは、至難の技である。

それを克服して新潟育ちながら日本各地ですぐれた作庭や修復を進めた人に田中泰阿弥がいる。

その成功の理由は古い庭と風景の成立に終生心を砕いたことにある。

昭和の初め京都・銀閣寺の菅憲宗住職の知遇を得て、中世以来の庭に密着できたこと、古き都の古今の文物芸能を吸収、これを生きた技として身につけた。硬軟の文化を併せ得たのである。

新潟で京都で岩手、山形、東京、静岡でその庭に接すると、骨格のすぐれていることの中に、古

典の匂いとともに泰阿弥の体臭が新しさが感じられる。それはこの人の生きざまがつくり生んだものというほかはあるまいと思う。

いま庭づくりの技を均一に学ぶ人が多いありさまを見ると、熱心さは凄く感じるものの、学び方に泰阿弥の幅と深さが乏しいように思う。

私が泰阿弥を尊ぶのは、古典主義に見えるその仕事に現代があること、人への気づかいに長じていることにある。

龍安寺の作品がある画家の川端龍子は「昔の名園模倣でなく今日の生活にぴったりの庭が必要」といった。庭は現代人のためつくること、直すことこそ第一と考えたい。

戸田 芳樹（株式会社戸田芳樹風景計画代表取締役）

日本庭園美の視点

二子玉川の日本庭園の作庭現場に2人の若いノルウェー人が見学に来た。彼女たちはランドスケープアーキテクトで、毎年2週間ほど京都を中心に滞在し、日本庭園を見学しているそうだ。現場でも熱心に細部まで耳を傾けていたのが印象的であった。

私は少し前からヨーロッパの作品に自分と通じ合う何かを感じていた。それらのスケールは人間的で、自然との関係が深く、ディテールが細やかでなぜか懐かしい。この様に感じるのはヨーロッパの伝統なのか、他の影響によるのか、疑問に感じていた。

彼女たちに出会い、はっと気が付いた。これは

新たに始まったランドスケープの「ジャポニズム」ではないかと。ヨーロッパの作品の中に日本的な美の源流が見え隠れする姿を見たからだ。「わび」「さび」の抽象概念でもなく「石組」「燈籠」の即物でもなく、美の創造に導くものとは何か。建築家菊竹清訓の「か」「かた」「かたち」の哲学では、概念は「か」で具体は「かたち」となる。大事なポイントは「か」と「かたち」を結ぶ「かた」の存在である。日本人の私が懐かしく感じたのは、日本の「かた」を彼らが見出し応用したからではなからうか。

「かた」は「プログラム」「システム」であり、コンセプトとデザインを結ぶ触媒の機能を持つ。「かた」を示す日本美の用語は「アシンメトリー」「あ・うん」のぞき」「片身替り」「見立て」等多種あり、古典から今まで様々なジャンルで使われている。近年において

も、デザイナーの田中一光氏の作品には大胆な「片身替り」があり、日本航空のロゴには「のぞき」の表現が目につく。映画の世界では黒澤明監督の「逆遠近法」や「あ・うん」の構図、小津映画の端正な「アシンメトリー」や「メタファー」、「シンボル」等が見られる。

日本の庭園界は長い間「か」と「かたち」のキーワードだけで多くを語ってきたと思う。今「かた」の考え方を取り入れれば、過去の庭園作品の評価とデザインにおいて新しい刺激と美へのいざないをもたらすであろう。

中瀬 勲（兵庫県立 人と自然の博物館 副館長）

造園の魅力を広げる

造園の研究・教育に大阪府立大学で19年間、自然や環境に関する生涯学習に兵庫県立「人と自然の博物館」で23年間にわたって従事してきました。皆様方の日本造園組合連合会の歩みと同期間に活動してきたと思いますと感慨深いものがあります。この40年余の間、造園の専門家と自負しながらも、博物館勤務が長くなってしまいました。この意味では、やや異なる側面から造園をみることができました。「造園の魅力を広げる」観点から、「生涯学習・環境学習」と「生物多様性」の重要性について述べます。

わが国は本格的な少子・高齢社会に入っています。博物館は生涯学習を担う機関ですが、次の

時代を担う子ども達の環境学習を生涯学習の一環と位置づけて、人と自然の博物館では環境学習を重点事業としています。ものごころがつく頃の子ども達、幼稚園や保育所の子ども達、そして、小学生、中学生、高校生を対象にして、自然や環境のことを楽しく学ぶ講座、展示などを企画し実践しています。公園は格好の学習のフィールドですし、造園そのものが環境学習の重要な要素であることはいまでもありません。造園と生涯学習の融合は、子ども達のみならず、これから増加する高齢者に対して重要な課題であると思います。例えば、折角造成した公園や緑を、より良い意味でマネジメントすることもあります。

次に、国際的な視点からみると、これまで議論されてきている地球温暖化防止と生物多様性確

保の課題があります。温暖化防止について、炭酸ガスの吸収源である緑について再確認すると共に、生物多様性について造園分野からさらに言及する必要があります。遺伝子、種、群落レベルの生物多様性、これらは生きものを扱う造園の基本であるといえます。これまで営々と培ってこられた英知や技術を発揮される時代に来ていると思います。

生物多様性などを通じた環境学習等の推進は、「造園の魅力」を広げる新たな側面であると思います。

中村 一（京都大学名誉教授）

楽観と楽感

造園という職業には、一種の楽観がただよっている。それが何であるかは分かりにくい。

強いていえば、造園の仕事は楽しい。この楽しさを多くの人と分かち合いたい、というような気持ちも知らない。

これまでの40年、造園連を通じ、アカデミー会議や現場見学に出席し、多くの庭師さんと出会ってきた。そして全国どこに行っても、造園の楽しさを守り、広げていこうという気持ちがあふれていた。世の中の景気が良からうが、悪からうが、この気持は、皆んなの間に、いつも流れていた。

おそらく、これから、造園を楽しむ人は増え、それに呼応して庭師さんの仕事も、安定成長してい

くだろう。造園連もますます重要になり強固になっていくと予想される。これは楽観の一面である。

他方、楽観と言う言葉は造園の本質の一部を示している。楽しんで見るのは、造園の仕事そのものである。造園は商品を作り出すのではなく、楽しんで見られるように、環境を造り治す。そのために、草木を始めとする生き物たちを活かすのが造園の技である。もっと正確に言うと、身近な生き物は、観る楽しみだけではなく、あらゆる感覚を楽しませてくれる。

楽観と言うより、誤解を恐れずに言うならば、「楽感」こそ造園の存在理由である。楽感がある場所は、実にさまざまであるが、人と人、人と生き物が共生する場合は、まちがいなく楽しい。

楽感の場づくりが造園の本質であり魅力である。

楽感の場は、自然環境と大いに関係がある。特に自然環境がつながっていることと関係がある。今日の都市的生活環境は、道路や建築の人工的環境によって、自然的環境のつながりが分断される。このつながりを回復し、楽感の世界を広げるのが造園の仕事である。

それは一見、悲観的な仕事のようにも見えるが、短期的な儲け仕事という見方を離れて、一生の仕事と思えば、楽感成就のために専念することができよう。

造園連に結集される皆さんは、毎日、自然とのつながりを求めて、難問の解決と厳しい実行に向けて取り組んでおられると信じている。楽観と楽感のはざまで。

野田坂 伸也（株式会社野田坂緑研究所） 日本庭園とガーデニング

今から10数年前、突然ガーデニングという庭造りが始まり、瞬間に燎原の火のように日本全国に広がりました。今では新しく造られる庭の多くがガーデニングタイプかエクステリアタイプの庭で、日本庭園を発注する人は激減してしまいました。その理由は様々あるでしょうが私は次のように考えています。

- ①生活の洋風化がようやく庭にまで到達した。住宅も衣服も、食物のかかなりの部分もとくに洋風化したのに庭だけが日本庭園、ということがそもそも不自然だったのです。庭は生活に必須のものではなかった為に、洋風化が遅れていました。ようやく自然な姿になったと考えられます。
- ②従来の日本庭園は対社会的な体裁を整えるた

めに造られることがほとんどでした。ガーデニングは発注者が自分で庭造り、庭いじりをしたいのです。ところが日本庭園は庭師が造り、庭師が手入れをし、所有者は自分の庭なのに手を出せない、こんな庭は嫌だ、というわけです。

- ③家庭内で女性の力が強くなり、庭造りの主導権を女性が握るようになった。そのため女性の好きな草花主体の庭——それは自分でつくり育てることができる——が多くなった。

- ④一般庶民には造るのにも手入れにも金のかかる日本庭園はなかなか発注できない。

スタイルだけ見て「ガーデニングは草花の庭」と思っている人が多いのですが、ガーデニングの庭の本質は「所有者が自分で造り手入れをする庭」と言うことです。つまり、所有者の自己発現の手段

の一つなのです。（それに対して日本庭園は庭師の自己発現の場です）。今では庭造り、庭いじりの楽しさを知った人が非常に増えましたから庭造りの主流が従来のような日本庭園に戻ることは無いでしょう。世界に冠たる日本庭園の芸術性、精神性の高さなどを主張しても、それとは無関係の価値観でガーデニングが行われているという現実には直視しなければなりません。

ガーデニングを否定的に捉えず、ガーデニングのおかげで庭造りをする人は何倍にも（あるいは何十倍かもしれません）増えたと言うことに着目してそれに前向きに対応することを考えた方が良いと思います。若い人にも魅力の感じられる新しいスタイルの日本庭園の創作も必要です。

庭の意義が根底から変わってしまったのだと言うことを認識して、その中でできることを考えていくようにすべきだと思います。

野村 勘治（有限会社野村庭園研究所） 造園の魅力を広げる

古来、我国の庭園は石組を骨格としてきた。近年石組は成りを潜めている。

ガーデニングがこれを追いやったかという単純にそうとは言えそうにない。明治以来の捨石的なあしらいがそうさせたと言ったのは我師重森三玲であった。弟子と言えどもそればかりではないと思う。いずれにしろ全体的に石組に魅力が無くなったのは否めない。何是だろう。ガーデニング以前に石組がそれ程主張性を持たない庭が既に主流になっていた。雑木の庭である。

庭は絵画と共に姿を変えて来た。庭を部屋から見ると考え、それを当たり前とする我国では、絵画性を重視する。日本画はそれ以前の中国の

山水画から、都市近隣の自然の風景を描くようになり、川合玉堂等東京の画家が武蔵野の雑木林を描くのと同時に、これに対応し雑木の庭が始まったと言って良い。今もその延長線上にあるが、同時に石組が衰退した。しかし絵画に描かれていない訳ではない。流れの周辺や岩場等の岩盤が描かれている。

一部の造園家は絵画が描かれている岩場を表現したが、大半は相変わらず古典的な意匠で、重そうな石が据る。これでは施主も逃げたくなる。絵画が描く世界を造園が対応できなかったからと言える。ガーデニングのフラワーガーデンが入って来たらもうお手上げで徐々に庭の仕事そのものが無くなって来た。ゆえに石組をする機会がなくなり、以前に増して石組が下手になり、やがて造園家が

石組から逃げ出した。日本の庭において骨格である石組がだめになったら、造園家のアイデンティティーの喪失である。雑木と花と取り合せ魅力がある庭を造るのはそれ程無理ではないと思う。今も魅力あふれる京都の庭は石組あつてのものである。石は庭に安定をもたらす、リズムを作り、見立てにより山岳が神仏になり、心の有様に応じて様々な姿に変化し、経年変化の風格を庭にもたらす、近年の自然を求める好みに最も対応するアイテムでもある。

今一度庭の石組みを見直すところに、庭の次の時代が開けると思う。脚下照顧、今一度先人達の仕事を見直すのは石組だけではない。モダンも古典の土台あってこそしっかりしたものとなる。多くの芸術家を見て思う。

古橋 宜昌（有限会社エクスプランニング代表）

創立40周年に寄せて

一言に造園といっても公園など公共のものから個人庭園まで、その範囲は多岐に渡りますが、私が生業としております個人邸の庭園の設計を通して感じていることを少しお話をさせていただきます。

ご存知のように我々日本人は古くから建物と庭を一つの住空間としてとらえ、家を建てる時はどんな敷地が狭くても必ず庭と一緒に作るという考え方が当たり前でした。それが「家庭」という言葉からもお分かり頂けると思います。

しかし、残念ながら最近の施主は出来るだけ樹を少なくして欲しいとか、庭を全てコンクリートで固めて欲しいと要望される方も少なくありません。

最近の建売り物件などは樹がほとんど植えられ

ておらず、殺伐とした家が並んでいるのを見ると背筋が寒くなります。このような家で生まれ育った子供達が将来結婚し、自分たちの家を持つとした時、実家に樹が一本もなければそれが普通なのだと勘違いしてしまうのではないのでしょうか？そのような無機質な住宅が街中に増殖してしまう恐怖を感じてしまいます。

最近の住宅の外観はスタイルも外壁の色も個性が強くバラバラです。そんな住宅が道路沿いに並んだ時、果たしてその街を美しいと感じるでしょうか。やはり美しい街並みを実現させるには造園という仕事を抜きには考えられないのです。

時代とともに造園の考え方も変化し、新しい素材や施工方法も毎年増え続けています。この業界に魅力を感じて学んでいる若い方達も増

えています。

どうか我々が提供出来る緑の力の素晴らしさを少しでも多くの方に認知して頂き、緑量豊かで美しい街並みが日本全国に増えていきますよう、引き続きご尽力頂きますよう祈念しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

丸茂 喬（株式会社マルモ出版代表取締役・ランドスケープデザイン編集長）

日本文化を担う“造園”という遺産

最近の大学の学部、学科には地域環境科学、環境緑地、環境情報等の名称が多くみられる。環境〇〇と言う名称は抽象的で実践的教育の表現としては曖昧である。

以前の“造園”という名称は影が薄くなった。これは一体どういう事か。

日本の都市は江戸時代に見られる城を囲む掘割があり、その先に大名屋敷や町屋が連なる庭園都市の様相を呈していた。そこに必要とされていたのが作庭術、農業土木技術などの“造園”という職能であった。

現代の日本は日本の都市づくりに必要な“造園”という職能教育が軽視されているように思える。日

本文化を土台にした土地の顔に相応しい歴史・文化を現代に継承する“造園”には実践が伴う教育が必要であり、理論重視の環境〇〇などの教育方針では日本文化を担う造園の人材が育たない。

また一方で世界共通言語となりつつある“ランドスケープ”と言う名称も文科省は認めないらしい。現代の社会を論ずる思想・哲学に必要な「グローバル」と言う視座がある。活動は現場重視のローカル化を、視点は広い視野に立ったグローバル化を目指す。このような捉え方をすると、実践教育はローカルを重視した“造園”を、同時にグローバルな視点は“ランドスケープ”が教育現場に反映されるべきではないか。

私がランドスケープのジャーナルに携わる事で教訓を得た、岩城亘太郎、小形研三、荒木芳那、

井上卓之、中島 健氏等は日本の庭園文化を背負って都市に開かれた現代造園のモダニズムを切り開き、近代から現代に造園技術をつなげたパイオニアである。

また深谷光軌（深谷光軌氏は外空間作家として自らを名乗っていたが）、池原謙一郎氏等もグローバルな視点を持ち現場主義を貫いて、活躍していた造園家であり、ランドスケープアーキテクトでもあった。その先人たちの韓業を教育の現場に反映した、造園教育が実践されねばならない。その教育が実践されないと、造園界にとって大きな遺産を失うことになるかと危惧している。

残された時間の中で、日本で唯一の専門雑誌『ランドスケープデザイン』の発行を継続させ、偉業を成し遂げた造園家の遺産を次代に繋げていこうと思っている。

吉谷 桂子（ガーデンデザイナー）

生活と調和する庭

「人類にもっとも重要で、もっとも求められている芸術は何か？」

「答えは、美しい家である。…美しい家は、庭をまわってなくてはならない。家のインテリアは、庭の連なりになるように…」

産業革命後の英国で、世界で最初に始まった自然保護運動の旗手でもあったウィリアム・モリス（1834～1896）。アーツ&クラフツ運動を興したデザイナーの言葉です。

どんなに小さな庭でも、たとえひとつの植木鉢でも…。家々に植物が美しく寄り添う街並みは、実に美しいものです。

モリスがこの提唱をしたのは、かれこれ150年も

前のことです。日本は幕末か、そんな時代に、英国の中産階級の間では、室内装飾への注目が高まり、それと同時に、花柄のカーテンや壁紙なども大量生産されるようになっていました。

イングリッシュガーデンが台頭したのも、丁度そんな時代です。王侯貴族や上流階級だけでなく、産業革命で生まれたサラリーマン、中産階級が次第に増えて行き、家を持った人々が庭に花を植え、そこで咲いた花を室内に飾り、庭の眺めや、室内にも花のある眺めを楽しむようになっていきました。それが、150年が経過した現代の英国にも脈々と引き継がれています。

今や時代の変化が急速すぎて、しかも複雑で、10年後の日本人の意識がどんな風になっているのかは、想像もできません。しかし、美しい植物の

ある景色は、いつの時代も人の心を癒し、それは常に求められています。

ただ、時代の流れは、常に違ったスタイルのデザインを求める傾向があります。また、造園の世界では、それぞれの時代に、人々に好まれる樹種や花の品種も変わります。

それを思うと、それぞれの作り手が、時代の流れに敏感であることは大切なことだといえます。それをファッションであると、軽視しないで。世界じゅうの現代美術や建築の傾向、流行の音楽、文字通りファッションにも興味を持ち、あらゆる文化に触れ、時代の形勢とともに生きていく姿勢も、ひとつの造園家のあるべき姿であると思います。

永遠なる文化としての庭園

アカデミズムの世界にいと、幸いにして造園界全体を俯瞰する事が出来る。そうした中で、日増しにこの連合会への組織的評価と期待が論者の中に高まりつつあることを告白しておこう。

未来は、科学・技術・技能の正三角形の構造により獲得できるものであるが、造園界に限らぬものの、その構図が近年逆転しはじめている。頭でっかちとなり、錯誤した科学が幅を利かせ、その一方技能は衰退、技術又空洞化し始めている。一言で言えば、リアリズムの欠如とでも言うべきものであろう。その為、現場から生まれるニーズ、それに対応する創造的な知恵、そこから生まれる技術、そしてそれら一連の事象を科学すると言った、未来につながるあるべき体系の構造が崩壊しつつあると懸念するのは一人論者だけであろうか。

その遠因は、時代の要請から緑量と言う言葉に代表される量への関心が横溢するあまり、一般の人々のみならず、造園界そのものが主として経済的要因で魅了され、伝統の中にある重要な思想とそれに連動した技術や技能を置き忘れがちと

なった事にある。しかしこの連合会は、ある種の頑迷さが見て取れるほど、常に技能を中核にするという思想を変えなかった。そして個々の会員に対し、高ぶらず驕らず台所から入り込む様な目線を常に大切にして、等身大の団体活動を貫いてきた。

歴史を紐解くまでもなく庭園と言う文化は、人類が発祥して以来のものである。まして米国の「ジャーナルオブジャパニーズガーデン」に代表されるように、日本庭園の評価はただの様式美に留まらず、その背景にある思想と共に世界的な評価が高い。

今日未来に向け限界が見えてきた地球の自然資源の様子や、自己回復力を失いかけている生命圏と言った地球環境問題に対し、改めて。半径6400 kmの僅かに最大30 kmしかない生命圏こそが真の囲われたエデン（楽園）、つまりガーデンであるとの認識が進んでいる。

そうした人類の未来に対する危機感の深まりと認識は、日本と言う複雑であるが故に美しく多くの恵みをもたらすと同時に、災害を含めた過酷さを示す国土の中に培われてきた、自然を敬愛した独自

の空間表現と、手入れと言う概念でその効用と美しさを最大限、しかも恒常的に維持する技能や技術を理解したい、或いは知りたいと言う関心が生まれるのは当然のことであろう。

言うまでもない事であるが、我国に発達した造園技術には、生物を取り扱う上に不可欠な謙虚さと、それを可能にする絶妙な技能を伴わせている。植物は成長をし、重い石は沈みながら互いを支え合うといった当たり前な事を基礎にした造園の技能。故に取り扱う道具を大切に、段取りに時間を掛け、始末を大切にする。そうした造園人の匠の心をこれまでと同様に、頑固なまでに連合会と言う舞台で相互に触発し合いながら大切に育んで欲しい。

それこそが時代を超越した足許の不易であるばかりでなく、決して大袈裟では無く、行き詰まろうとしている地球の未来に取り組む上での答えの一つでもある事を自覚し、歴史と伝統の中でもそうであったように、それを我々の矜持としようではないか。

等身大で生き物でもある人間が、同じ生き物である、植物や土壌等他の生物社会の存在を尊重しない限り、人類の未来は約束されないからである。



ジャパン 庭園マイスターズ

全国造園技能競技大会

■第1回全国造園技能競技大会

同じ支給材料を使い、限られた時間、区画の中で、庭づくりの技とデザイン力を競う「第1回全国造園技能競技大会」が、造園連主催、厚生労働省の受託事業（ものづくり立国の推進事業）として、平成23年3月に山口県で開催された。「技能五輪に年齢制限がなければ、自分も出てみたい」という各地の組合員の思いがきっかけとなり、シニアの大会が実現されるに至った。

大会には全国から20組60名が出場し、年齢層も20代

～70代まで幅広く、女性チームもあり多彩な顔ぶれとなった。年齢制限のない全国規模の技能競技大会は、造園史上初の試みで、同じ支給材料を使いながらも、2日間の競技期間中に、まったく異なる20種類の庭（6m×4m）が出来上がる様子は、一般市民にも大きな感動とインパクトを与え、会場は多くの来場者で賑わった。

完成作品は競技終了後も約3ヶ月間展示され、業界内外から大きな反響があった。

■会場 山口県きらら浜（きらら庭園フェア会場内、道の駅「きららあじす」近隣地）

■所在地 山口県山口市阿知須509

■大会日程 2011年3月3日（木）～5日（土）

■スケジュール 3日（木）／14:00～17:00 材料下見、開会式

4日（金）／8:00～17:00 競技

5日（土）／8:00～14:30 競技

19:00～21:00 表彰式、交流会

■後援 中央職業能力開発協会、山口県、造園・環境緑化産業振興会

■協力 社団法人日本造園組合連合会 山口県支部

■運営体制 【上級審査員】審査員長／尼崎博正、審査員／川村善之、荻原博行、高橋幸雄、寺下弘

【専門審査員】リーダー／野村 脩、審査員／齋藤 弘、橋本正男、磯野進吾、廣瀬 武、高尾宗克

【運営委員】委員長／白井 昇、副委員長／谷尾喜次、運営委員／小杉左岐、齋藤悦郎、高橋善和、藤倉榮之

【競技委員】委員長／宇田川辰彦、副委員長／岡部敏雄、競技委員／沖津昭治、佐藤 博、沖島和夫

【補佐委員】委員長／岡部敏雄、補佐委員／市山昭生、杉山 彰、官野信治、坂本利男、中村義博、貞安敏充、重村秀仁



支給材料

【石材】

景石・大 800kg～600kg 程度 2 個、景石・中 300kg 程度 7 個、景石・小 60kg 程度 7 個、ごろた（天端あり）3㎡分（希望者には伊勢ごろたを別途支給 2 袋）、板石（白）300×600mm 10 枚、縁石 100×120×600mm 10 本、サビ砂利 0.4㎡、加工用の石直径 400～500mm 1 個 砂岩（水鉢、モニュメント等に加工可能）、張石 3㎡、オーストラリアレンガ 50 個（25 個づつ 2 色）、ピンク口（白）90×90×90mm 50 個、石積み用石材 0.7㎡

【竹・木材】

モウソウ竹 直径 100～120mm 長さ 7m 3 本、唐竹 4 寸（12 本束）1 束、唐竹 3 寸（24 本束）1 束、削り丸太 2.4m 直径 80mm 3 本、削り丸太 1.8m 直径 80mm 2 本、ぬき板（荒カンナ仕上げ）約 90×15×4000mm 5 枚、垂木（荒カンナ仕上げ）約 45×45×4000mm 9 本、バタ角（荒カンナ仕上げ）約 90×90×4000mm 2 本、

【樹木等】

高中木（常緑）2～3m 5 本／シラカシ（株物）、ソヨゴ、ツバキ、カクレミノ、シマトネリコ（株物）、モッコク、モクセイ、エレガン

テシマより 5 本選ぶ（複数利用可）、高中木（落葉）2～3m 7 本／イロハモミジ、モミジ（株物）、コナラ、サルスベリ、ヒメシャラ（株物）、ヤマボウシ（株物）より 7 本選ぶ（複数利用可）

【樹木等】

低木（常緑）1m 以下／ツツジ類 20 株、アオキ 3 本、アセビ 3 本、カンツバキ 2 本、低木（落葉）1m 以下／ガマズミ 2 本、ニシキギ 2 本、イヨミズギ 2 本、ミツバツツジ 2 本、コグマザサ 20 ポット、コウライ芝 10㎡、ハツユキカズラ 5 ポット、リュウノヒゲ 30 ポット、ヤブラン 10 ポット、《A》花 30 ポットとコケ 3㎡または《B》花 60 ポットのどちらかを選択

【シュロ縄】

大束 5 把

【クギ、ビス】

必要数現地至急

【客土】

1㎡

お帰りなさいお父さん

チーム名／大分の美男子（大分県）

松田 智（有松庭園） | 砂山豊伸（砂山庭園）
下原幸一郎（下原造園）

【コンセプト】

仕事で夜、暗くならないと帰らないお父さんを竹ボンボリの暖かい明かりでお迎えする前庭です。道行く人たちから見ても楽しめ、水と触れ合い中へ入って世間話などしたくなる庭を目指しました。山肌から染み出る清水の一滴も見え隠れしながらやがて大海となる、その姿は父の生き様。お父さんに庭の権限も帰るといいですね。



過去・現在・そして未来へ緑…

チーム名／Green to the future（長野県）

小池 守（小池造園） | 小池健太郎（同）
原 健吾（同）

【コンセプト】

銀賞

過去は板石の天端を加工し荒れた山を表現。そこに立てた縁石は栄光を意味し未来へ突き進む。現在は芝生に景石を据え中央の輪は人間の和を表現。景石は人を表しその氣勢は未来の光に向けた。未来は希望と願いを込め樹木と下草、花を植栽。中央部には光をイメージした竹垣を設置。築山は光の放射線をイメージして形成。その奥には自然の恵みとなる雨をイメージした竹垣を施工。



春の陽だまりの中で…

チーム名／シンワ [ジャポネスク ヌーボー]（東京都）

市川 稔（新和造園株） | 神田昇一（同）
玉城和則（同）

【コンセプト】

明るく開放的なデザイン／参加したくなる寛ぎの庭／木漏れ陽と温もりを感じる庭／竹のパーゴラでモダンな雰囲気を演出／陽溜りに誘うアプローチ／多種の竹垣で奥行きと空間造り／時を越えた静寂のオブジェ／芝庭に調和するロックガーデン



春一番

チーム名／長州マイスターズ（山口県）

松村和幸（有勝山造園） | 山根敏彦（有山根造園）
繁 徹範（株繁農園）

【コンセプト】

銅賞

瀬戸内に春の風が到来、山には多くの蕾がにぎやかに春を持ち出し、山河では風になびゆくゆったりとした流れと州浜。立ち止まる人に春を感じ、ピュアな心をおもてなす。ふるさとに春一番。春の訪れ。



棲家

チーム名／チームてんくろう（高知県）

西原厚博（株庭園センター） | 濱氏広己（有葉山庭園）
横山信介（株佐々木造園）

【コンセプト】

素材が職人の扱いによって息吹く。眺める、使う為の庭であるよりも空間自体が、何かが棲んでいるかのような生命力を含む景色づくり。



『ふるさとの風』 遠き山辺に

チーム名／チーム青い森（青森県）

駒井勝美（駒井造園） | 工藤博英（有大王農園）
芳賀順一（有大王農園）

【コンセプト】

のどかな田園風景、里山、清水の流れ。どこか懐かしいそんな原風景のもつ既視感は、私達の心に安らぎを与えてくれます。自然のおおらかさ、そして記憶に蘇る心のふるさをそよ風に任せ、この空間に。



里山からのおくり物

チーム名／カササギチーム（佐賀県）

石丸春光（株伊万里春光園） | 久保正伸（同）
石丸直人（同）

【コンセプト】

金賞

ひと仕事終え、軒下に腰掛けて外を見渡せば雲間からこぼれ日が差し込み、里山から海に向かって虹が架かっている。平野では、花がワラボッチの中で寒さを凌ぎ美しく咲いている。『ひと昔し山里から綺麗な水が里山を通り川を流れ平野を通りぬけ海に行き着くまでに虹が架かっている様子を表しました』。



『融合の萌しーゆうごうのきざしー』

チーム名／チーム八王子（東京都）

龍崎浩二（庭作） | 佐藤武久（里美園）
二宮靖知（有加藤園）

【コンセプト】

普段私たちが営み続けるための文明。その発展の裏側にはいつも自然との対立があります。人々が自然を無視し文明を優先すれば、時として自然は力をもってそれを窘めます。そんななか私たち造園屋は、文明を使い暮らしの中に自然の一部を『庭』として伝えてきました。そんな私たちが自然と文明の融合、そして人々の営みとの架け橋になれるよう目指し表現できればと思い作庭しました。



讃岐の清涼の庭

チーム名／さぬきの風（香川県）

金藤 晃（金藤造園） | 橋本昌義（植昌橋本造園）
高田 明（有龍虎園）

【コンセプト】

讃岐山脈から流れてる清水。その山里に人の温もりを感じる場所がある…。人は、水と共に、時代と共に、自然を感じて生きてきた。その流れという“道”の上に私たちは立っている。そして果てしなく、続く“道”の上に…。



春の予感

チーム名／長州いぶし銀（山口県）

渡邊和昭（有休休造園） | 上利昭典（有大平園）
沖田明久（有沖田庭園）

【コンセプト】

雪解け水に運ばれてきた、花筏で、春が近づく気配を表現した。／庭に縦横に走る竹垣は、心の沸き立つ気持ちを表現している。



せせらぎ

チーム名／大阪 3K 連合（大阪府）

楠井民夫（株庭樹園） | 北田直輝（関西植木株）
岸本貴志（株乾造園）

【コンセプト】

自然風な枯滝を主として庭に取り入れた、空間を創造しながら、草と木と石など限られた素材を使い、人工的な庭を山や川などに見立て自然感をそこなわず、そこに身を置くだけで川のせせらぎが聞こえてくるかのような庭の創出を目指します。庭と一体となり庭の魅力に、心がみたされ、癒され、休まる様な庭を作庭したいと思います。



瞳を閉じれば聞こえてくる故郷の声

チーム名／チームボンド（石川県）

多島昭洋（多島造園） | 竹林義浩（竹林造園株）
山名和成（山名造園株）

【コンセプト】

少年時代に五感で感じた事。冬の日本海の荒波ややさしく見守ってくれている霊峰白山。また、その眼下に広がる森の木々たち。そうした古里の自然の中で育つことの出来た喜びや絆・感謝を表しました。



車庭を主庭に

チーム名／美香子's (山口県)

吹上笑美 (株)多々良造園 | 名越久美子 (有)岡部造園
上利春香 (株)高山造庭園

【コンセプト】

特別賞

みて楽しむ。駐車場から玄関まで、自然や四季を感じられるもっとも身近なアプローチ空間。

カースペースも庭の一部。車社会の現在、一家族に必要な駐車場と一体感のある芝生広場。

こどもも大人も活かせる場。庭を囲まず OPEN で近所の人はもちろん、友達も呼んでワイワイできる交流の場。



お庭の小鳥

チーム名／ガガガのガーデナーズ (鳥取県)

岡本善博 (有)岡本緑化 | 中谷陽介 (株)谷尾樹楽園
河口卓司 (有)岡本緑化

【コンセプト】

小鳥たちがさえずり、木の実をついばみ水浴びをする。町中で身近に見かけた光景が近年少なくなったと思います。

小鳥たちに快適な空間は、私たち人間にも大切な空間なのでは？ 造園に携わる者として、そんな空間を提案できればと思います。



安芸の宮島

チーム名／サンフレッシュ広島 (広島県)

山岡裕幸 (株)山岡晩翠園 | 松本洋一 (同)
堀口 寿 (同)

【コンセプト】

宮島は太古より自然崇拝の対象とされてきました。その幽玄さを醸し出すため、瀬戸内海のやわらかさと神の島の力強さを対比させて穏やかで厳かな「安芸の宮島」の佇まいを表現します。



園路 (みち)

チーム名／やっちゃらい (島根県)

松浦隆介 (松浦造園株) | 持田茂稔 (有)もちだ造園
平崎 弘 (有)井谷賀造園

【コンセプト】

特別賞

人生を表現しています。横に並ぶ孟宋竹は人生の節目、竹垣は人生の壁。階段は人生山あり、谷あり。園路に敷くいろいろな材料で人生の迷いを表現。植栽は人生のなごみを表現しています。今にも園路 (みち) を歩みたくなりませんか？ 一歩踏み出しませんか。また変わった気分になります。園路 (みち) の奥の砂利道。その先に何があるのか。見る人の気持ちでこの庭は完成します。



しまなみ百景

チーム名／チーム奥本（愛媛県）

大田珠生（奥本造園） | 小野 豊（同）
矢野和樹（同）

【コンセプト】

特別賞

開催地・山口と愛媛をつなぐしまなみ海道。その美しい景色の中心となる橋。瀬戸内の波の力強さ、静けさ、やわらかさ。波の音と潮の香りを漂わせる百景。



癒しへの架け橋

チーム名／常陸の国 次世代庭師衆～(株)大平造園土木(茨城県)

大平裕貴（株大平造園土木） | 遠藤富広（同）
坂場一彦（同）

【コンセプト】

仕事や学校から疲れて帰ってくる家族が清流に架かる温かみのある木製の橋を渡る。世間の喧騒からはなれ温かい家族が待っているやすらぎの空間に導く『架け橋』。そんな玄関までのアプローチを枯山水庭園で表現しました。



古都の山河

チーム名／チーム ROUGAN（福岡県）

山本辰雄（小嶺造園） | 白石信和（有若松緑地建設）
舌間正義（舌間造園計画）

【コンセプト】

特別賞

左手前の貼石から板石は、現在の城下町を表現したもので、その奥には城積みがあります。光悦寺垣風の竹垣は、山の稜線を表し、その右側の山より流れてきた水が、お城のお堀まで達しています。又、城積みの間から木々が芽を出し、今では大きく成長し、壊れかけた城積みが、時代の流れを物語っています。さらに、城積みの後方には、年に一度の打ち上げ花火を見ることができます。



「瀬戸内海」と「日本海」

チーム名／長崎のよか男（長崎県）

西田卓生（有西田緑清園） | 生野信一郎（株浮羽園）
大塚真一（株琴花園）

【コンセプト】

国内最大のカルスト台地と鍾乳洞を持つ秋吉台を中心に、穏やかな「瀬戸内海」と荒々しい「日本海」という異なった表情を持つ山口県の美しい海岸線を表しました。

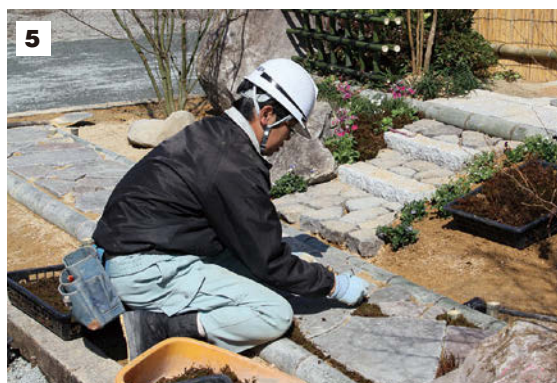


第 1 回全国造園技能競技大会



造

- 1.Green to the future
- 2.長州マイスターズ
- 3.カササギチーム
- 4.美香子's
5. やっちゃらこい
6. チーム奥本
7. チーム ROUGAN



景



1

1. 里山から海に架かる虹(カサギチーム)
2. 竹を使った小窓、優しい色合いの草花が親しみやすい空間に(美香子's) 3. ピンコロの高さや角度を変えることで波のような優雅な曲線をつくる(チーム奥本)



2



3



4

4. 小さな景の組み合わせがバランスの取れた景をつくる(長州マイスターズ) 5. 巧みな石積み(チーム ROUGAN) 6. 竹で見事に表現された未来の光(Green to the future) 7. 松江の名庭「菅田庵」を思わせる園路(やっちゃらいこい)



6



5



7

■第2回全国造園技能競技大会

次回も早期開催してほしいとの要望をうけて、第2回大会は開催間隔を4年→2年に短縮して、平成24年10月に長野県諏訪市で開催された。

前回大会より支給材料を減らして、区画サイズも小さく4m×3mとし、一チームは2人一組の構成にした。規模を小さくして制限条件を厳しくすることで、各チームの技能や創意工夫、デザイン力などがさらに求められる大会となった。

第2回大会は全国から13組26名が集まり、子弟、女性

ペア、同級生、外国人留学生とのコンビなど様々な編成のチームが出場して技を競い合った。隣接会場では、若手技能者が出場する「第50回技能五輪全国大会」も開催され、相乗効果もあり多くの来場者に造園の魅力をPRした。

完成作品は当初翌日に撤去する予定であったが、会場を視察した諏訪市長も競技の模様に感動し、終了後も約1ヶ月展示されることになった。



- 会場 諏訪湖イベントひろば
- 所在地 長野県諏訪市湖岸通り 5-11
- 大会日程 2012年10月25日(木)～27日(土)
- スケジュール
 - 25日(木) / 14:00～15:30 材料下見、15:30～16:30 開会式
 - 26日(金) / 8:30～16:30 競技
 - 27日(土) / 8:30～13:30 競技
 - 19:00～21:00 表彰式、交流会
- 後援 中央職業能力開発協会、造園・環境緑化産業振興会
- 協力 社団法人 日本造園組合連合会 長野県支部、長野県、諏訪市
- 運営体制
 - 【上級審査員】審査員長／戸田芳樹、審査員／川村善之、寺下 弘、井上剛宏、小沼康子
 - 【専門審査員】リーダー／橋本正男、審査員／磯野進吾、杉村文夫、佐藤 博、石丸春光
 - 【運営委員】委員長／白井 昇、副委員長／谷尾喜次、運営委員／齋藤悦郎、藤倉榮之、高橋善和、高尾宗克
 - 【競技委員】委員長／岡部敏雄、副委員長／沖島和夫（補佐委員長兼任）、競技委員／沖津昭治、北山安夫、齋藤 弘
 - 【補佐委員】委員長／沖島和夫、補佐委員／宮澤良弘、瀬在忠彦、荻原洋彦、遠藤信幸

支給材料

【石材】

庭石・大 70kg 程度 2個、庭石・中 50kg 程度 5個、庭石・小 20kg 程度 20個、伊勢ごろた(3寸) 2袋、伊勢ごろた(1寸) 3袋、鉄平石乱張り 2㎡、鉄平石コバ(30×80×300mm、50×80×300mm) 各 50本、サビ砂利(3分) 5袋、オーストラリアレンガ(2色：クリーム、茶系) 各 25個

【竹・木材】

唐竹7本(4節上り、回り180～200mm) 3本、唐竹15本(4節上り、回り70～90mm) 1束、丸太(自然木) 2.4m末口60径～75mm 3本、丸太(自然木) 1.8m末口径60～75mm 2本

【樹木等】

高中木(常緑)／クロガネモチ 3m 1本、シラカシ 2.5m 1本、ツバキ 2m 1本、高中木(落葉)／モミジ株立 3m 1本、コナラ 2.5m 1本、ヤマボウシ 2m 1本、低木 1m以下／アセビ 1本、ナツハゼ 1本、ナナカマド 1本、ニシキギ 2本、ツツジ類 10株、グラントカバー／オオバジャノヒゲ 20ポット、コグマザサ 20ポット、ヤブラン 20ポット、スノードラゴン 10ポット、草花／現地調達 30ポット、コウライ芝 3㎡、スギ苔 1㎡

【客土】

0.5㎡

龍のいる島

チーム名／風林火山(山梨県)

角野 勝(株明桃園)

守屋智康(さわやか造園)

【コンセプト】

龍は、中国神話の生物で古来神秘的な存在として位置づけられてきました。秋になると淵の中に潜み、春には天に昇るとも言われています。また、今年は辰年でもあるので島から龍が覗いている様子を表現しました。



いつも故郷に山口郷

チーム名／美香子's（山口県）

吹上笑美（株多々良造園）

上利春香（株高山造庭園）

【コンセプト】

進学・就職・結婚と地元を離れた友達を想い、考え出した山口郷。地元にかくさんある山々を竹のモニュメントで表現し秘境の入り口である錦帯橋のアーチをイメージした石橋を渡ると湯田温泉を感じる足場へと続く…いつもいつまでも故郷はともにあることを伝えたい！！ …そんな庭です。



風と水

チーム名／チーム下関（山口県）

殿井悌一（株日新造園）

濱田陽介（有浜田造園）

【コンセプト】

特別賞

この作品は諏訪のイメージを基に植栽・竹垣・景石でアルプスを、石張り・砂利で湖を表し、コバの鉄平石で御神渡りを表し、風と水とが作り出す、神様の足跡と、悠久の時を感じる諏訪の風景を表現しています。



カナダの思い出

チーム名／九州男児（福岡県）

山本辰雄（小嶺造園）

白石勇人（有若松緑地建設）

【コンセプト】

私たちは、カナダでの技能五輪国際大会にコーチ、選手として出場しました。その時カナダで見た風景をこの庭に再現してみました。まず、小端積みと竹を使ってカナダの切り立った山々を、砂利敷きでその山すそを流れる川を表現しました。石張りは山から少し離れた所にある町並みをイメージしています。カナダでの貴重な経験を思い出とし、この庭を作庭します。



もうひとつの天竜川

チーム名／竹上興業（長野県）

竹村幸司（ランドフィット）

上野則秋（フィールドアップ）

【コンセプト】

銀賞

雄大に向かい合うふたつのアルプスに抱かれるように流れる天竜川。諏訪湖を源とし、穏やかに伊那谷を潤しながら遠州灘へと向かう。しかし、ひとたび荒れると尾根からの雨を集め、「暴れ天竜」へと変わる。

そんな対照的な川の表情をイメージしました。



緑（夫婦臥竜垣）^{めおと}

チーム名／ 284kun+G（香川県）

今田康正（今田作庭園）

ペッツオルド ジョン（今田作庭園）

【コンセプト】

縁あってドイツの研修生を受け入れて、彼の将来、素晴らしい造園家を目指してくれ、優秀な庭師の空気を肌で感じて欲しく、参加しました。西洋の直線に対して日本の曲線の美を、今までのセットメニュー講習会で習った技で考えました。～山の沢で鯉が登っていき竜になっていく～この世の中に、ご縁あって出会った・出会う人々が、益々幸せを乗せて羽ばたいて行けるように、心情を表現しております。夫婦仲良く、いつまでも…。



北アルプスの恩恵

チーム名／ Green-orchestra TOYAMA（富山県）

野開吉彦（野開造園土木株）

今井浩司（今井雅石園植木株）

【コンセプト】

ここ長野県と私たちの富山県は、北アルプス山脈から大自然の恵みを受けています。空気の澄んだ自然豊かな大地、清流が流れ込む広大な海。大自然に感謝を込めて、北アルプスの恩恵を表現しました。



希望の大地

チーム名／伊達な粋～みちのくからの刺客～（宮城県）

菱沼 敦（有繁樹園）

相原雅敏（御堂平造園）

【コンセプト】

失われたあの美しい東北の海沿いの故郷に思いを馳せ表現したいと思いました。鉄平石張りはアス式海岸の海岸線と仙台平野を、穏やかな海の水面を芝生で表し、伊勢ゴロタで波しぶきを。さらに、防波堤には蛇籠を組み、防潮堤に小端積みを用い、自然あふれる山並みを石組みと植栽にて表現しました。そして、そこに住まう我々の希望や力強さの象徴として太陽の光をイメージした竹垣を創造しました。自然を嫌いにならないで欲しい、こんなにも素晴らしく癒されるものだし、共生して行く事が大切なのだと伝えれば嬉しいです。



御神渡し伝説

チーム名／信州すわっこ 41（長野県）

後町和宏（杉菜園）

濱 賢（はまけん造園）

【コンセプト】

古来より伝説に「諏訪の御神渡し（おみわたり）」があります。諏訪湖が全面結氷し、寒気が数日続くと氷が厚くなり、轟音と共に氷が裂けて盛り上がる現象です。諏訪大社上社に住んでいた二柱の神様が、あるとき夫婦喧嘩をして、奥さんが下社へと出て行ってしまいます。極寒の夜、寂しくなった上社の男神が下社へ通った道筋と言われ、諏訪の七不思議のひとつにも挙げられています。この伝説をモチーフに設計してみました。諏訪の神様を見習って、世のお父さんも足しげく、奥さんのところへ通うべきでしょう。

銅賞



小さなプライベートガーデン

チーム名／チームヒゲ（東京都）

木下和久（GREEN ART）

龍崎浩二（庭作）

【コンセプト】

お客様より家族でくつろげる庭がほしいと言われ、庭から家をながめられる空間と考えました。パーゴラ内の石のイスに座り、タバコを吸ったり、芝生では子供が遊べ、炉では落ち葉たきをしたりと、小さい庭ながら心ちよいプライベートな庭を作ってみました。

特別賞



しまなみのそよ風

チーム名／西風紅葉（セイフウモミジ）（広島県）

藤井幸介（風林造園）

伊藤竜太（㈱西条庭園）

【コンセプト】

瀬戸内の風土は穏やかでしまなみも、山なみもなだらかな風景がどこまでも続きます。仕事帰りに、車を止めてしばらく海を眺めていると、心も穏やかな気分になります。しまなみ海道に架かる橋も今ではすっかり瀬戸内の風景の代表になりました。遠くに見えるしまなみを竹垣で、島に架かる橋をレンガと鉄平石コバのアーチで表しました。

金賞



連山の眺め

チーム名／京都府造園協同組合青年部（京都府）

前田大介（㈱京都造園）

大平一貴（㈱大平造園）

【コンセプト】

市松と直線的に畳まれた乱張り。そこには、人々の営み、気配が存在する。

そこから見る連山の眺め。山々が幾重にも重なっていて。陰影がつくりだす山の陰しさ、優しさ、そして自然の気配…。それは遠い昔より変わらない。山の美しさ、雄大さがそこにある。

特別賞



ハケ岳への道

チーム名／若造（東京都）

秋山佳弘（秋山造園有）

野津手靖久（秋山造園有）

【コンセプト】

久しぶりの休日、ドライブで休憩しようと車を降りて小道に入ってみると陰しくごつごつした道、でも見上げると雄大なハケ岳が広がり、道脇には草花や山野草が咲き湧水が流れている。忙しい日常で忘れてしまう風景、旅でこそ出会える風景を表現しました。



第2回全国造園技能競技大会

造



1. 風林火山 2. 美香子's 3. チーム下関 4. 九州男児
5. 竹上興業 6. 284kun+G 7. Green-orchstra TOYAMA
8. 伊達な粋〜みちのくからの刺客〜 9. 信州すわっこ 41
10. チーム ヒゲ 11. 西風紅葉 (セイフウモミジ)
12. 京都府造園協同組合青年部 13. 若造



景



1

1. 諏訪湖が凍結し轟音と共に氷が裂けて盛り上がる「諏訪の御神渡り」を石組で表現（信州すわっこ 41）
 2. 石による竜の鱗は「暴れ天竜」の躍動を感じさせる（竹上興業）3. 乱張りにより石橋に表情を与える（美香子's）4. 力強い石組は北アルプス山脈を、鉄平石の乱張りは広大な海を表す（Green-orchestra TOYAMA）



2



3



4



6



5



7

5. 竹組みでアルプスを表現（チーム下関）6. 険しい道の向こうにはハケ岳（若造）7. レンガと鉄平石のアーチはしまなみ海道に架かる橋（西風紅葉）8. 市松で人の営み、気配を表現（京都府造園協同組合 青年部）



8

しずおか国際園芸博覧会

浜名湖花博で『パシフィックフローラ大賞』受賞

創立30周年を記念し、2004年静岡県浜松市で開催された静岡国際園芸博覧会パシフィックフローラ2004（愛称 浜名湖花博）に『家族が集うやすらぎの庭』を出展し、最高賞のパシフィックフローラ大賞を受賞した。庭園の展覧にあたっては、設計は組合員などによる設計コンペとし、

施工は全国44名の次代を担う研修生による技術研修会として施工された。さらに毎月開かれたガーデンショーに向けての植え替えやショーガーデンとしての演出など、10年経過してもあせない現代の庭造りに活用された多彩な技があった。



創造する伝統

—「パシフィックフローラ大賞」受賞の意味するもの

京都造形芸術大学教授 尼崎博正

いつの時代にも創造的であったものだけが伝統となり、その伝統が新たな創造性を刺激し続けてきた。造園の世界も例外ではない。

「家族が集うやすらぎの庭」の「パシフィックフローラ大賞」受賞はまさに、日本造園組合連合会が培ってきた「創造する伝統」の賜物といえよう。

背後の樹林との一体感、通路側の華やいだ雰囲気。一歩足を踏み入ると、土塀と草屋根の四阿が醸し出す鄙びた佇まいは日本文化への郷愁をそそる。それが絶妙な植栽と様々に変化する水の表情によって、デッキやパーゴラのあある空間と不連続な連続性で無理なく繋げられている。じつに巧妙、かつ洗練された演出だ。

豊かな自然表現、見事な空間構成、日本の伝統的な造園技法と新時代を予感させる斬新な意匠との融合、そして確かな技術・技能。それらが一つになって深く心に響いてくる庭である。

自然とのふれあいを通じて生活に潤いをもたらしてくれる庭とは？

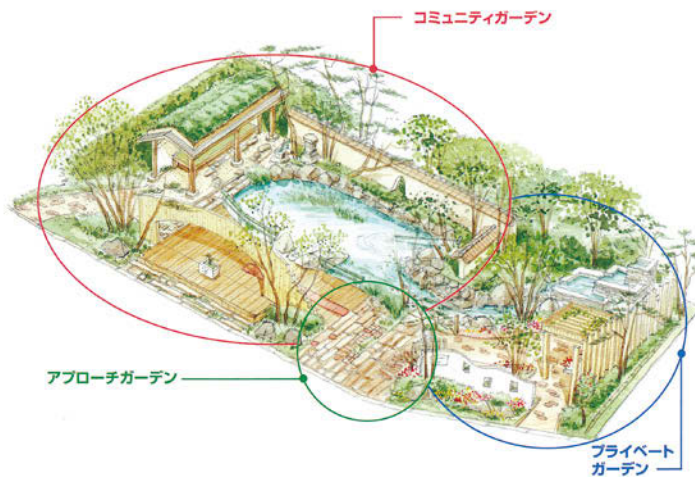
この21世紀の命題に答えたのが「家族が集うやすらぎの庭」であった。

そして「パシフィックフローラ大賞」の受賞は、この庭が世界の人々に感銘を与えるとともに、組合員の方々の豊かな見識と確かな技術・技能が国際的に評価された証にほかならない。

設計から施工までの全プロセスを通じて、丹精込めて作庭にあたられた皆さん方に心から敬意を表したいと思う。

(浜名湖花博出展報告書より)

家族が集うやすらぎの庭 全体図



「パシフィックフローラ大賞」受賞の表彰状、トロフィー、楕

～造園連の庭の作品講評～

(花博会場に掲示されたパネルより抜粋)

◎土塀や石組、流れ、植栽など巧みで、卓越した造園技術を感じる

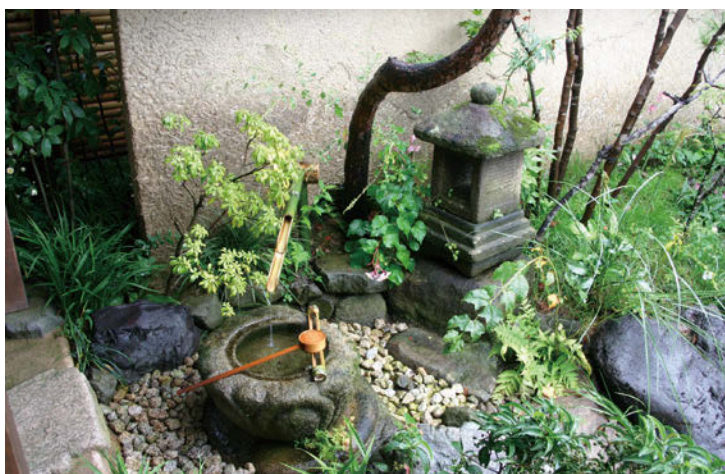
◎四阿に座って見た庭の景色は奥行きがあり、落ち着いていて素晴らしい

◎秋の植物にこだわり、季節の花や実を所々にあしらって、細かい点にも配慮が感じられる

◎一般家庭でも十分に活用できる技術や組み合わせ方があちこちに散りばめられている

◎草屋根の屋上緑化など環境共生の時代にマッチした作品である

■コミュニティガーデン ～安らげる和の空間に賛辞～



【設計意図】

家族が集まり、団楽するスペースです。週末にはデッキの上にテーブルを持ち出し家族全員での食事、採りたての野菜やハーブティで友人を招いてのホームパーティ。池の金魚の世話も家族皆の仕事です。年代の異なる家族が共通して楽しめる空間となっています。

コミュニティガーデンにあるアーチは窓枠を意識してデザインしております。広縁に出れば3ゾーン全体の庭が見渡せ、また、アーチ越しに見れば、恰も、部屋越しからの風景のように見えます。(設計者村田卓雄氏)

【見どころ】

やすらぎ和の空間に、3種類の石積み、石組み、つくばい、灯籠、流れ、池、土塀と多彩な技法が盛りだくさんとなっており、竹のアーチが額縁・窓枠効果で景色を引き締めている。池にはメダカやアメンボウ・カニ等の生き物が成育し、子供たちの人気のスポットとなった。年齢に関係なく楽しめる空間。



第1期研修生

■プライベートガーデン

～季節を楽しみ、時にはアートとのコラボも～



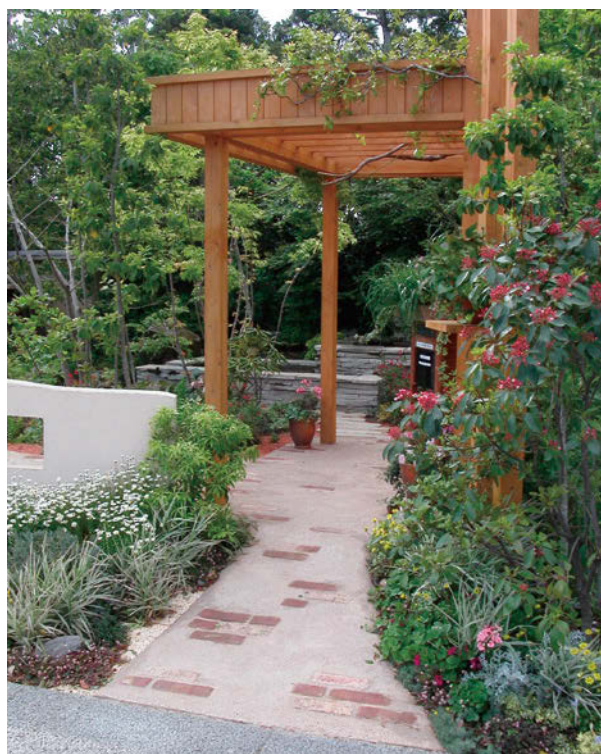
【設計意図】

自然と最大限触れ合い、朝日と共に土いじりに興じるそんな暮らしをイメージしたスペースです。暑い陽射しの時には、パーゴラの下でせせらぎの音を聞きながらひと休み。花台には得意な季節の草花の寄植を飾りぼーっと眺めてみたりもする。ヒツジ草に隠れているメダカの状態や、畑の野菜の成長が気になったりもする。生物や植物と触れ合うことで自然からの恵みをいっぱい感じてほしいと思っています。

(設計者村田卓雄氏)

【見どころ】

砂岩の小端積み角池から流れ出たやさしい流れ、園路は足に優しい土系舗装にレンガで模様付け、周囲に瓦のリサイクル品を使用、ジョリパットで仕切った花壇は季節により、6回植え替えられ、そのつど違った表情を見せた。特に夏場対策として、ななこ垣や砂利や石組み、秋には、焼き物や書とのコラボレーションも展開した。



第2期研修生

■アプローチガーデン

～おしゃれなアプローチ、和と洋をつなぐ～

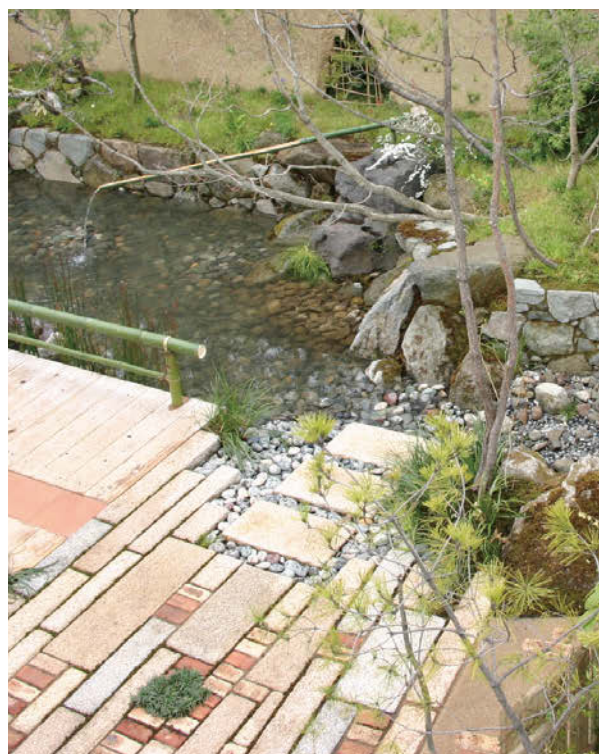


【設計意図】

家庭や来客を向かい入れるスペースです。お洒落な雰囲気 で 伝統文化が伝わってくるデザインにしています。素材は、古材レンガ、板石、砂利などを使用しています。正面には日本の佇まいと誇れる土塀があり、古木からは清水が滴り落ち懐かしさを与えてくれます。土塀の廻りの野の草花が優しく微笑んでくれます。(設計者村田卓雄氏)

【見どころ】

板石はビシャンで加工、オーストラリアレンガとの取り合わせと空隙に花も植え、デザイン的にオシャレな雰囲気をかもし出した。左の和と右の洋と異質な空間を植栽によりつながりを持たせた。プライベートガーデンの入り口の木戸については、指導員の中で大議論となったもので、第2期工事で作り直したもの。



第3期研修生

ガーデンショーへのしつらえ。コンテストで優秀賞

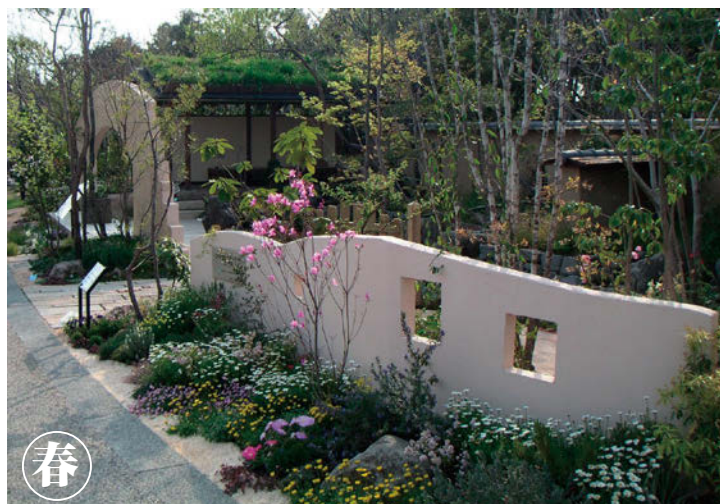
■ガーデンショーコンテストに向けての庭の演出

浜名湖花博では、AIPH 公認の国際コンテストが会期中 8 回実施された。うち、4 月のオープニングガーデニングショー、5 月のグランドガーデニングショー、10 月のファイナルガーデニングショーが主要展示会であり、この他に 5 回の季節毎のテーマによる審査が行われた。花の植え替え計画と花の状態から、主要展示会に加えて 6 月、7 月、9 月の 3 回合計 6 回の季節の展示会にエントリー、いずれも優秀賞などに多数入賞した。

ガーデンショーエントリーに当たっては、基本の掃除手

入れ以外にガーデンショーとしてのテーマを持った模様替え・演出が要求された。例えば 7 月の涼のガーデニングショーでは、「涼しさ」をどう表現するかが問われ、太い青竹を使い、涼しさを演出した。

庭園の中でも、ガーデニングショー向けの演出は、主としてプライベートガーデンの花壇で行った。季節の花に加えて、竹かごや竹垣、景石、砂利、さらには焼きもののアートとのコラボなどの演出は、住宅庭園でも記念日や来客などの際の庭の楽しみとして応用できる。



指導員・技術技能委員で
植え替えた（平成 16 年 9 月）

多彩な技法優れた高い技術が評価される 伝統技法の継承、技術の見どころ



石積み

浜名湖花博出展庭園には池の周囲に護岸として4種類の石積みが施工された。池の正面には野面積み、その左右に崩れ積み、流れの部分には城積み、水源となる角池には御影の切石を使った小端積み（小口積み）が施工された。



植栽

植栽については、軽やかさ＝落葉樹でも面白みがない何か違う材料をと探していた時にであったのがアカマツであった。大分県の里山のわずかな土で育ったひねたアカマツ。この個性を生かし、幹や枝の線を生かした植栽を行った。雑誌『庭』でも、植栽のうまさを感じられる作品との評を頂いた。また、植栽後半年で開園というスケジュールであったため、背景の植栽については、密植し、濃い緑となるよう心掛け、時代を感じさせるようにした。



土塀・築地塀

浜名湖花博で採用された土塀の工法は、本来の工法ではなく、コストや手間を極力省きスピード化を目指した方法である。また、古びた感触を演出するために、わざと穴を穿って骨材を露出させたり、土壁部分をチェーンで傷つけてみたりして、朽ち果てた様を醸し出すなどの工夫もしている。



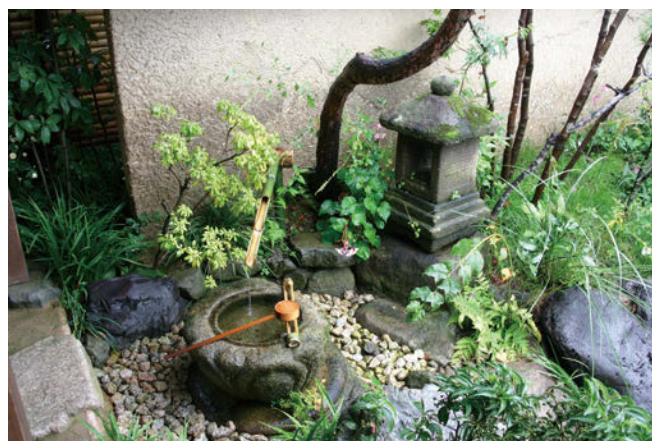
池・流れ

角池下段の池から、流れ落ちた水が細く流れて池に注いでいる。水源の角池から池に注ぎ込むまでは約5mしかないので、水源付近を深山の溪谷のように、そして、ネムノキあたりで、里の草原の中を流れ、海に注ぐこも景色を意識して流れの石組みをした。

園路・アプローチ

アプローチガーデンの主体は御影の板石だが、所々にアンティークレンガを入れて変化を出している。また、アンティークレンガも単調にならないように色や大きさをかえたり、下草を植えたり、コケ目地にしたりして見栄えを考えている。御影の板石も側面を「びしゃん」で叩いて角を取っている。

園路は三和土風のしあげになっているが、ここでは「エコクリーンソイル」という製品を使っている。この製品は、環境に優しく、施工の省力化が出来るという2つの大きな特徴で注目されている材料である。



石組み

庭園のポイントとなった景石は高野貴船石。それぞれの石の表情を生かした石組みを行った。デッキに組み込まれた景石は、外の園路からの視線を意識し、土塀、池、アーチそれぞれの線と対比し、石の個性が主張するよう据え付けられている。

つくばい

四阿の席前に据えられ、つくばいとしての用をなすよう組まれている。水鉢は、伽藍石の上に据え付け、中鉢で、法にならって組まれている。鉢明かりとして、年代物の置き灯籠が据え付けられた。

浜名湖花博の成果

■浜名湖花博の出展の成果を現代庭園に生かす出展の技術的成果

平成2年の大阪花博に続いての庭園出展であったが、15年間に庭を巡る環境は大きく変わった。流行語となった『ガーデニングブーム』 ガーデンショーそして花が住宅や街に根付いた。そして、地球環境の保全のためのリサイクルや屋上緑化など環境への配慮が重要なテーマとなった。

造園連の出展のテーマは、『2004年、人々の憩う生活の庭』

高度な技法を盛り込むが、豪華な庭園ではなく、暮らしの中で身近かに感じられる庭、生活の場としての庭園を提案するものだった。石積み、石組み、土堀、つくばいと高度な伝統的な技法に基づいた庭園づくりとともに、果敢に新しい技術や新しい花の見せ方に努力した。現実の庭造りに活用できるヒントがたくさんあった。

1. ガーデンショーの展示方法

浜名湖花博ではショー庭園という分野が確立し、庭園の美しい姿を見せ、演出がすぎてもいけないが、テーマの設定やエイジング、季節の花の見せ方など、現実の庭づくりとは違うショーガーデンならではの見せ方が確立したと思われる。

2. 省力施工

土堀や園路の施工については、伝統技法を省力施工により短期間施工を実現した。土堀はワイヤーメッシュ利用、園路はエコソイル利用と手間が掛かる＝高価であることを理由に現在ではなかなか施工されない工法も、新しい素材や工法を大胆に取り入れることにより、お客さんに提供できることを実現した。

3. 環境への配慮

花博庭園では、花や下草の植栽地には、剪定枝チップより作成された堆肥と剪定枝から作られた炭を混入し、花の成長は素晴らしいものがあり、これが評価された。また、池の水質浄化にも活性炭を利用、プライベートガーデンの縁取りには、解体家屋の瓦の再利用砂利を敷き込み、これらの環境への配慮が評価された。

4. 市販品も手を加えてオンリーワンに

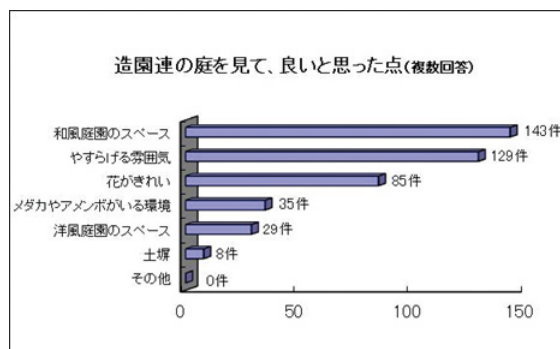
造園連庭園では、瓦やレンガなどにリガーデン素材を活用している他、市販品も加工を加え、オンリーワンの資材として活用した。庭園解説用パンフレットを入れたポストは、上部に草屋根を取り付け、プライベートガーデンの木戸は、タカショー製品のアメリカンゲートの一部加工して時計草などの吊る植物をからませることによりオンリーワンの品に、いずれも、安価な製品に手を加えることにより、オンリーワンに変身させた。これらの手法は今後の住宅庭園で大いに取り入れてほしい手法である。

5. 花素材の活用

花をどのように見せていくかが大きな課題となった。

今後活用してほしい手法は、

- 苗代のかさむ1・2年草を減らし、多年草・カラーリーフ・球根・ハーブと、多彩に使用したこと。
- 和風庭園の部分では、山野草のほかに、和の庭にも向く、可憐な草花を積極的に植えたこと。
- 庭園のエイジングの演出
草花のポット苗を植える場合にある程度密植し、大株を効果的に使用する。
- 石材や砂利と花の組み合わせ 真夏の対策に
- ななこ垣や竹垣素材と花の組み合わせ



■これからの庭の方向を示すやすらぐ庭への賛辞

浜名湖花博会場は会期中 500 万本の花が咲き競った。その中で、造園連の庭園では、四阿に据わり憩う人々、池のアメンボやメダカに喚声を上げる子供たち、可憐なアザミの花に足を止める人、土堀の前の草むらに郷愁を覚える人、入場者の皆さんは異口同音に『落ち着く、やすらぐ』という言葉が聞かれた。華やかなプライベートガーデンよりは、落ち着いた土堀の前の和の庭が人気を呼んだ。このような落ち着いた身近な自然を感じられる庭づくりが求められているといつてよい。やすらぐことのできる庭づくり、これからの庭の方向が示された。

浜名湖花博出展

1. 展示期間

平成 16 年（2004）4 月 8 日から 10 月 11 日

2. 場所

「浜名湖ガーデンパーク」内の碧の庭ゾーン約 150m²

3. 設計コンペ

基本設計については、コンペティション方式を採用し、造園連組合員と青年部、組合員事業所の子弟、従業員から広く作品を募集した。募集テーマは「2004 年、人々の憩う生活の庭」。設計にあたっては、高度な技法が盛り込まれていること、暮らしの中で身近に感じられる庭であること、花博という名前からも花を使うこと、バリアフリー・リサイクルといった人と環境に優しい庭づくりなどが設計条件として設けられた。



造園連出展庭園が移築された袋井市・越智邸庭園

【作品審査会】

設計コンペには、全国より 44 作品の応募があり、最優秀作品 1 点、優秀作品 5 点が選ばれた。

■審査日／平成 15 年 2 月 13 日（木）

■審査委員／審査委員長：尼崎博正（京都造形芸術大学教授）他 4 名

■最優秀作品（1 点）／村田卓雄『素朴な庭のある暮らし 家族の集う庭』（有ムラタ造園／広島県）

4. 出展研修会日程

■第 1 期工事

第 1 クール／平成 15 年 11 月 10 日（月）～ 15 日（土）

第 2 クール／平成 15 年 11 月 17 日（月）～ 22 日（土）

第 3 クール／平成 15 年 11 月 24 日（月）～ 29 日（土）

■第 2 期工事

期間／平成 16 年 3 月 20 日（土）～ 24 日（水）

5. 管理と植え替え（平成 16 年 4 月から 10 月・主なもの）

4 月 4 日／オープニングガーデンショーコンテスト準備

5 月 15、16 日／グランドガーデンショーコンテスト対策植え換え

6 月 23、24 日／初夏のガーデンショーコンテスト対策植え換え

7 月 26、27 日／涼のガーデンショーコンテスト対策植え換え

9 月 1、2 日／初秋のガーデンショーコンテスト対策植え換え

9 月 27、28 日／ファイナルガーデンショーコンテスト対策植え換え

10 月 26～28 日／庭園の解体撤去《庭園は袋井市の企業オーナー越智邸に 17 年 3 月に復元された》

※このほか毎月 28 日には庭の日の広報活動を行った

6. 出展関係者名簿

■実行委員及び造園連四役

吉村隆一（東京）| 佐野藤右衛門（京都）| 伊藤 亨（富山）| 高取忠彦（佐賀）| 谷尾喜次（鳥取）| 吉川渉明（埼玉）

齋藤悦郎（宮城）| 曾我和彦（静岡）| 村田文男（愛知）

■指導員

小林 洋（山梨）| 宇田川辰彦（東京）| 野村 脩（東京）| 小林文明（茨城）| 荻原博行（長野）| 寺下 弘（滋賀）| 吉村隆顕（山口）

御手洗達雄（大分）| 森 次郎（東京）| 田中一郎（石川）| 平野正和（静岡）| 本田逸男（広島）| 西沢 護（東京）| 高橋幸雄（東京）

■研修生《44 名》

橋本 忍（青森）| 小原 睦（岩手）| 阿部浩章（宮城）| 森 広直（宮城）| 永澤洋也（秋田）| 佐久間 信（福島）| 中川英一（茨城）

吉田秀一（群馬）| 木下利男（埼玉）| 諸星恵介（神奈川）| 仲村清輝（山梨）| 赤池裕樹（山梨）| 角野 勝（山梨）| 牛山和重（長野）

小池健太郎（長野）| 鈴木一喜（東京）| 上原 剛（東京）| 宮腰和明（新潟）| 中川武志（富山）| 多島昭洋（石川）| 永井利昌（福井）

松本康男（静岡）| 横山和睦（静岡）| 鈴木亨拓（静岡）| 安間 斉（静岡）| 笠原 剛（岐阜）| 加古丞二（愛知）| 誉田浩之（京都）

徳田雅章（大阪）| 山本 優（鳥取）| 正田光一（広島）| 坂本利男（山口）| 椎野正敬（徳島）| 北嶋正美（香川）| 大田珠生（愛媛）

西森 保（高知）| 山本辰雄（福岡）| 中塚梅友（福岡）| 鳥飼一平（佐賀）| 末次康裕（佐賀）| 若杉直也（長崎）| 西村栄敏（熊本）

筒井邦生（大分）| 東 寿洋（大分）